

129. 膵がんの診断における膵シンチグラフィ-  
の評価

愛知県がんセンター病院 放射線診断部

佐々木常雄 金子 昌生 桜井 邦輝  
木戸長一郎

膵がんを対象として  $^{75}\text{Se}$  セレノメチオニンによる膵シンチグラムの病原診断率について考察した。

検査方法としては  $^{75}\text{Se}$  セレノメチオニン  $200\mu\text{Ci}$  を静注し、正面像（肝を含む）を撮影する。撮影時間は投与後20～50分の間に3～4枚撮影し、うち1枚は10度仰角で撮影する。装置はシンチカメラ（Nuclear Chicago）を使用し、前処置は特になかった。

対象とした膵がんは頭部がん19例、体尾部がん18例、乳頭部がん6例、合計43例である。

頭部がん19例のうち、17例は部位診断は正確であり、1例は体部に欠損が認められ、1例は全体に欠損が認められた。

体部がん18例のうち、17例は部位診断は正確であり、1例は全体に欠損が認められた。

乳頭部がん6例のうち、4例は膵自体の変化は認められなかったが、2例は膵頭部に欠損が認められ、頭部がんを疑われた。

以上の結果は膵がんの診断における膵シンチグラムの果す役割は大きいといえる。さらに誤診の原因について検討を加えると共に読影上注意すべきこと、膵シンチグラムに欠損を生ずる病態生理の問題について考察を加える。

130. Pancreas scintigram 214 例の計測値と  
その臨床的応用

慈恵医科大学 放射線科

高橋貞一郎 横井 綱寿 伊藤 博史  
第2病理学教室 石川 栄世

〔緒論〕  $^{75}\text{Se}$  selenomethionine による Pancreas scan が Blau, Bender (1962年) らにより紹介されて以来、多くの基礎的および臨床的研究がなされているが、著者等もまた本学で施行の Pancreas scintigram につき臨床的に次の諸点につき検討した。

1) 正常と考えられる99例の形態につき統計的考察を行なった。2) 異常と考えられる59例の臨床的検討を行なった。3) 異常 scintigram 中 biopsy 9例、外科手術10例につき、病理所見と比較検討した。4) 判定不能(21例)などは肝、膵の double scan が診断に有用であることを知った。

〔方法および対象〕 前処置を行わず、204例に Pancreas scan を実施した。R.I.  $400\mu\text{Ci}$  静注15分後に scan 開始した。

〔Scan 条件〕 B. L. 245, CW. 50, scan speed 25～50cm/min, D. F.  $\frac{1}{4}\sim\frac{1}{8}$ , Time 0.15 sec, collimator 37 holes, focus 10～15cm, Scintiscanner Aloka JSS 104 型、また double scan 法は Pancreas scan に引き続いて liver scan を行ない両者を色わけで打点したのについて判定する。

〔結果〕 1) 正常像は Hufeisenform (勾玉型)、transversale Form (棍棒型) および Sigmoidale Form (逆S型) に分けることができ、各  $\frac{84}{99}$ ,  $\frac{5}{99}$  および  $\frac{10}{99}$  例であり、Photoscintigram の tracing により、頭部、 $33\pm 4\text{mm}$ 、体部  $24\pm 4.4$ 、尾部  $29\pm 4.2$ 、全長  $136\pm 15.9$ 。全体面積  $38\pm 6.8\text{cm}^2$ 。これらの値より少ない値を示す症例は病的変化が推定された。2) 異常の考案、全体欠損16、頭部欠損5、体部欠損4、体尾部欠損7、尾部欠損5例で、全体および孤立性 warmarea を示す症例21、判定不能21例であった。孤立性および全欠損を示す症例の診断率は高いが、判定困難例に慢性膵炎および胆嚢胆道疾患があった。3) biopsy および外科手術19例の内訳として、膵原発、転移癌、膵 cyst、急性および慢性膵炎等が含まれ、診断率  $\frac{13}{19}$  例(約68%)であった。それ故他検査と比較して外科的適応決定に有力な手がかりを与えることが知られた。4) Double scan は特に肝膵の重なる判読困難例に有効であった。